



故 吉 田 光 邦 博 士

# 吉田光邦さんと西南アジア=研究会

会長 小野山 節

青天の霹靂というのは、正しくこのような事態を指すのではないだろうか。1991年5月1日に古希の祝賀会が開かれ、吉田光邦さんはいつものように、温顔で多くの参会者から祝詞を受けておられた。4日にドイツへ出発、病気のため予定を切上げ、17日急遽帰国して入院、そして7月30日に天国へ旅だたれた。まことに残念である。

吉田さんにわたしどもが西南アジア研究会の会長をお願いしたのは、1987年9月であった。『西南アジア研究』を定期的に発行するための方策を、それ以前にもまして各方面に働きかけていただき、ようやく軌道に乗りつつあった時期であった。

吉田さんの御活躍は、人間に係わるほとんど全分野に及んでいるが、ここではそのごく一部に過ぎない西南アジアとわたしどもの西南アジア研究会のことに限って触れておきたい。この追悼文に「西南アジア=研究会」と題したのは、吉田さんの西南アジアにおける調査活動をごく簡単に紹介しながら、本研究会との係わりを回顧しておきたかったからである。また、こうすることが、西南アジアに関する多くの分野の研究を進展させる上で重要な刺激となり、吉田さんの御恩に報いる一つの方法であると考えたからである。

吉田さんは、西南アジア研究会の1956年における創立当初から会員=顧問であった。この年に中近東で現在稼働している技術を調査する目的でイランに出掛けている。第一回のこの調査を含めて、3回にわたる長期の調査旅行を行い、西南アジアに現存する各種技術の記録とその歴史的意義の研究に大きく貢献した。

第一回は京都大学人文科学研究所に、藪内清教授を部長として設けられた中近東調査研究部より、「京大イラン学術調査隊」として1956年に派遣されたもので、吉田さんが隊長であった。『東方学報』28(1958)の「イランにおける各種技術の観察記」と『砂漠と高原の国』(三一書房、1957)に報告がある。第二回は京都大学学術調査隊の一班としてのもので、イラン、アフガニスタン、パキスタンのイスラム3国における現代技術の調査であって、『砂漠の十字路』(淡光社、1960)と京都大学学術調査隊編『文明の十字路——イラン、アフガニスタン、パキスタン調査の記録——』(平凡社、1962)で報告されている。第三回は京都大学イラン・アフガニスタン・パキスタン学術調査隊の一環として行われた調査

で、報告書は小山喜平氏(京都市立芸術大学教授)との共著で『西アジアの技術』として、1966年に京都大学より刊行された。どの調査でも同じであるが、吉田さんの技術調査は、やきもの、織物、金銀細工、銅細工、かじや、木工、靴づくり、モザイク、七宝、鉄砲、砂糖、塩、水車など、生活全般のおよそありうる技術を網羅しているばかりでなく、それらの技術による製品がどのような形で売買されているかというバザールの特徴にまで及んでいる点に特色がある。つまりそれぞれの技術が、どのような形で人々の生活を支え、文化を形づくっているかを、吉田さんは必ず調査して報告する。さらにそれぞれの技術について、なにを取り上げて、その該博な知識により、それが自生的なものか輸入されたものか、あるいは両者が合体したものかという観点から吟味され、多面的な検討の成果として示されるのである。

さらに重要なことの一つは、1966年に刊行した『ペルシャのやきもの』(淡光社)でも明らかのように、このような検討が過去の業績を十分に消化したうえでなされていることであり、第二は調査旅行中、吉田さんはその土地の文化を総体として理解しようとする努力を惜しまなかった点である。イラン、アフガニスタン、パキスタンのイスラム3国への調査旅行は、後に『啓示と実践——イスラム——』(世界の宗教5, 淡光社, 1969, 翌年同社より『星の宗教』と改題して出版)に結実させている。

吉田さんが博識の方であるということに異論を唱える人はいないであろう。元会長の織田武雄先生は、京大理学部宇宙物理学科を卒業されている吉田さんについて、「吉田さんは天文学以外のことなら何でも知っている」と評した。1971年の冬と記憶するが、それは本研究会を新しく織田会長、羽田明副会長、吉田編集長の体制で運営することを相談した後の宴であった。

会誌『西南アジア研究』の編集に吉田さんが加わって下さったのは第5号(1960)からである。第6号(1961)の刊行にさいして、1号から5号までのタイプ印刷を、当時の足利惇氏会長の勧誘と斡旋によって、活版印刷による外観上も本格的な学術雑誌に変貌させたとき、誌名の題字は会長からいただいたが、学会のシンボルマークは吉田さんの手になったものである(第6号, p.65 及び第14号, 1965, p.123)。

吉田さんが本誌に発表された論文は3編で決して多くはない。それは若い研究者の真摯な研究からうみだされる成果を発表する場として本誌が活用されることを、吉田さんが切望していたからである。また『西南アジア研究』が西南アジアの総合的研究を目指す学術雑誌として、特定の分野に片寄らないよう、わたしたどもにいつも注意を喚起された。

本誌に優れた論文を掲載して西南アジア研究会をいっそう発展させ、吉田光邦さんの期待と御恩におこたえしたい。